

ご入り用の方は

宇和島信用金庫 総務部 までご連絡ください

TEL : 0895-23-7000 (代表)

伊達宗紀公物語  
—天が赦した長寿大名—



宇和島信用金庫

—この街がけで、この街と未来を育く—



宗紀はとくに農民をいつくしました。  
秋の稲かりの頃、宗紀が領内の見回りを  
したときのことです。

宗紀は道に敷いてあつたムシロ<sup>ヨ</sup>をさりげ  
なくよけて通っていました。

「およけにならず、その上を通られては」  
と、お供の侍が言うと、

「もみの一粒一粒は農民のみなさんの日々の  
苦労と努力の結晶である。それを踏むとは  
申しわけないではないか」と、宗紀は注意しまし  
た。農民たちは、深く心を打たれました。

また、あるときは、お庭に雀が多いのを見  
て、雀が田畑を荒らしていいなか、家臣  
に確認させました。農民が大事に育て、  
みんなの暮らしを支えるお米に被害が出て  
はいけないと宗紀の心づかいでした。



宗紀は藩が栄えるよう力を注ぎました。  
いわし漁や木綿・塩・ろうなど特産品の  
開発をすすめ、これらを運ぶ大きな船を造  
りました。そして、農業技術の向上をはかり、  
融通会所（昔の銀行）をつくって商業を  
盛んにしました。

また、シーポルトの弟子であつた卯之町  
(現西予市) の医師二宮敬作に命じてオラ  
ンダ医学を広めさせました。

宗紀は、こうして人々が豊かで健康な  
暮らしができるよう気を配りました。

宗紀は、自分に藩主を繼がせてくれた  
父の六代藩主伊達村壽を、とても敬い  
大切にしました。

能好きな村壽のために京都から能楽師を  
招いたり、鳥料理を食べてももらいたいと鳥  
獵に出かけたり、親孝行に心を配りました。  
領民にも、親を大切にし、夫婦が仲良く  
家族みんなが助け合って暮らすよう命じ  
ました。



宗紀には心配なことがあります。後継ぎとなる男の子になかなか恵まれないのです。

そこで、親戚の幕府旗本山口家から  
亀三郎を養子に迎え、次の藩主にすることにしました。

宗紀は江戸にいるとき、幼い亀三郎をひざにのせてかわいがつたこともありました。亀三郎は元気で好奇心いっぱいの十一歳の少年に育っていました。

宗紀のもとで亀三郎は成長し、宗城と名を改め、宇和島に入りました。

宗城を養子に迎えてから、宗紀に宗城より十二歳年下の扇松丸という男の子が誕生しました。宗紀の子、扇松丸は、宗城の後継ぎとなり、伊達家を繼ぐということに決まりました。のちの九代藩主、伊達宗徳です。



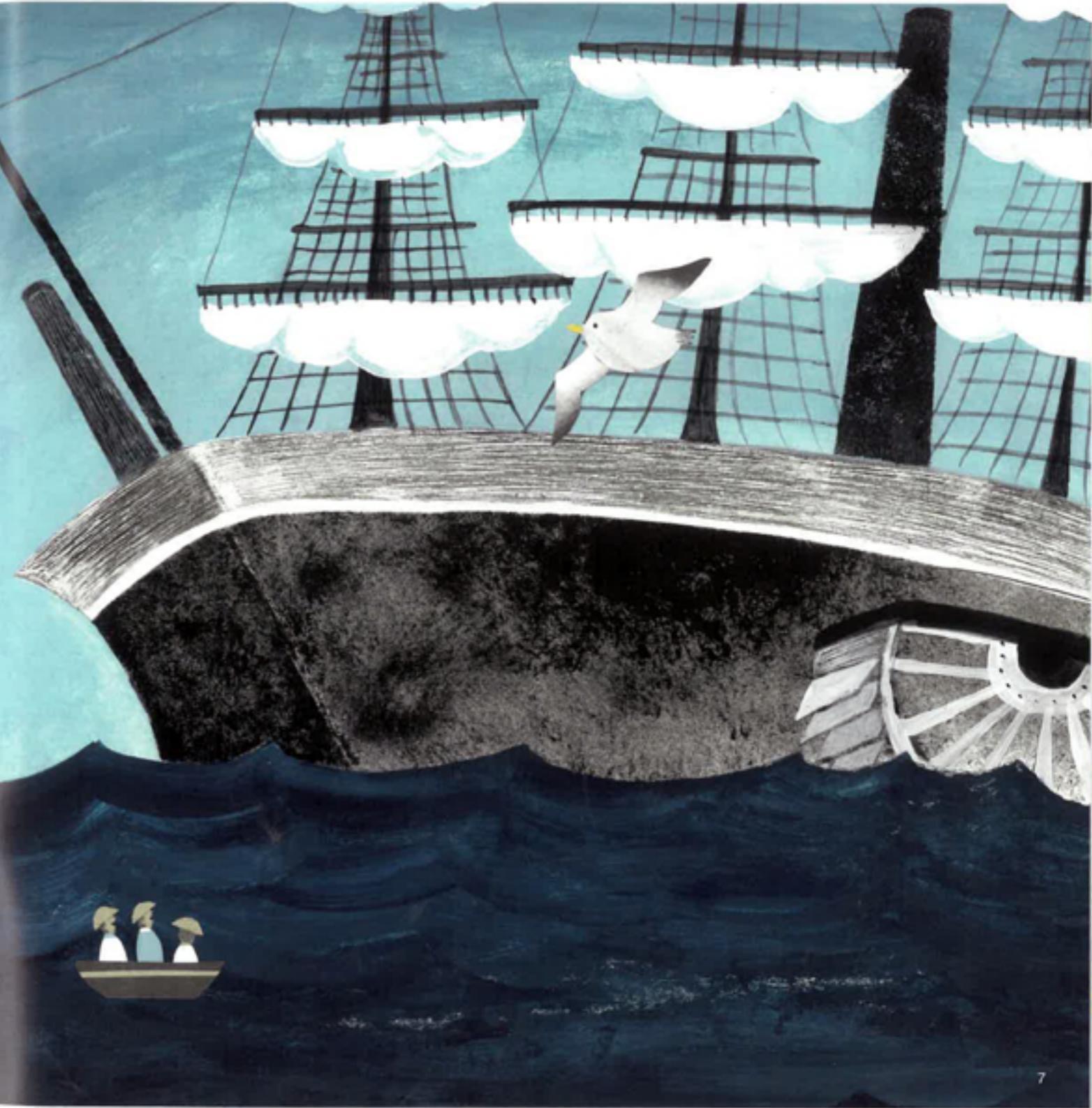
宗紀は、世界や国がどうなっているか、いつも注意をはらっていました。同じように日本のゆくえを、心配する諸大名や、いろいろな分野の人とも積極的に交流しました。この頃、日本では外國船が沿岸に出没し、攻撃されるのではないかという不安が広まっています。宗紀も心配し、攻撃にそなえて宇和島で大砲と火薬の製造を始めさせました。

そして幕府にも、軍艦や砲台をつくり、海岸を守る必要があると熱心に説明しました。若者たちの育成にも力をつくしました。

宗紀は、このような厳しい時代には、何よりも人の教育が大切だと考えました。武術や学問をすすめ、日本の将来を担う若者たちの育成にも力をつくしました。



宗「旗本」将軍直属の一万石天満の家臣で、将军と対面（御見聞）  
で度々の間接。  
宗「頭領」藩政時代からの優秀な子弟を教育する藩校が城下に設けられた。明治二十八年には上京学生の寮舎として東京神田の伊達家控え屋敷を「頭領」とし、現在は愛媛・南予地方出身者で東京近隣の大学に通う男女学生を対象とした「南予神田寮」に継承されている。



この時代、どの藩も同じですが、宇和島

藩も大坂商人からの借金が積もりに積もつてたいへんな金額になつていきました。宗紀は借金を二百年かけて少しずつ返していくことを商人たちに納得させました。

藩のお金のやりくりは楽になり、貯えも次第に増えていきました。

一八四四年、五十三歳の宗紀は、藩主を二十六歳の宗城にゆずりました。

徳川将軍は、それまで宇和島や日本のために戻くした宗紀をとても信頼していたので、「隠居されることを残念に思う」と惜しむ言葉を届けました。

隠居となつた宗紀は、宗城のよき相談相手となりました。

宗紀の貯えをもとに、宗城は宇和島の軍事近代化や国の政治に大活躍します。

「大坂商人」室町時代から江戸時代にかけて活躍した商集団。外国を排斥する攘夷思想は尊皇攘夷と結びつき、やがて倒幕運動に向かう。次期将軍に徳川慶喜を推す一橋派と徳川慶喜を推す西郷派が対立した。井伊大老は南郷派、伊達宗紀と宗城は一橋派だった。

「黒船が来た！」

一八五三年七月、ペリー率いるアメリカの軍艦四隻が江戸湾に侵入し、大砲を撃ち、日本に国を開き、外国との貿易や交流ができるよう要求しました。宗紀がかねてから心配していたことが現実のものとなりました。

外国の要求を武力でしりぞけようと/orする人々が、開国しようとする幕府に不満の声を上げて、日本中が大騒ぎになりました。一八五八年四月、彦根藩主井伊直弼が新しく将軍を補佐する大老になりました。井伊大老は開国は避けられないと考えていました。

宗紀は井伊大老と外交問題や將軍の後継ぎ問題について話し合いました。両家は初代秀宗の頃からの親戚同士で、宗紀は井伊大老を説得できる日本でただ一人の人物でした。

8

宗紀は時代と世界の流れを的確に見すえていました。

宗城が「外国人をしりぞけよう！」と唱えていた頃、宗紀は「日本の開国は避けられない」と冷静に考へ、日本がどのようにして国を守ればよいかを真剣に考えました。宗紀は開国に賛成でした。外国との貿易で国を豊かにすることが日本を守ることになると考えていました。

しかし、天皇をはじめとする開国に反対の多くの声を無視してはならないとも考えていました。

ついに、井伊大老は、天皇の許可がないまま、多くの反対の声をおさえ、アメリカと貿易を始める条約を結びました。

井伊大老は開国に反対する人たちを厳しく罰し、死刑にされた人や、強制的に隠居させられた大名もいました。

井伊大老は、反対していた宗城も隠居させようと考へました。宗紀は宗城のために、井伊大老と五回にわたって交渉しました。その結果、宗城は、自らの願い出による隠居ということになりました。

その後、九代藩主を宗徳が継ぎました。宇和島藩は宗紀・宗城・宗徳の三世代体制で、激動の時代を乗り切っていくことになります。

幕末から明治維新という時代は、国内で戦争もありました。しかし、宇和島藩は一人の犠牲者も出しません。人を大切にし、平和を願う宗紀の教えが行き届いていたからでしょう。

七十歳になつた宗紀は、

「若い頃から質素儉約に努め、苦勞してき  
た今や余生くらいはゆつたりと過ごしても、  
天は赦してくれるのでないか」と考えました。

そこで、老後の楽しみのためのお庭を  
つくることにしました。

お庭は、伊達政宗のよんだ詩の一節から、  
「天赦園」と名付けました。

住まいとして潛潤館、茶室、趣味の書を  
かくための春雨亭なども建てました。

「ご隠居様のご恩に少しでも報いたいので、  
どうか手伝わせてください」と大勢の人がやつてきました。

今からちょうど百五十年前の一八六六年、  
天赦園は完成しました。

宗紀は、きれいな花をみんなに楽しん  
でもらいたいと、天赦園を毎年四月から  
五月にかけて、領民に開放しました。

宗紀が春雨亭で書道をしているとき、  
たまたま通りがかつた人たちが、ひかえめ  
に様子をうかがつていると、

「こちらに来て見ていただきなさい」と  
近くに招きました。

少年時代から習字に励んだ宗紀は、晩年  
は書家「春山」としても有名でした。旧  
大名や明治政府の政治家などがこそつて  
春山の書をほしがりました。

明治になつて、旧大名の多くは東京に  
うつり住みますが、宇和島を愛した宗紀は  
天赦園に住みつづけました。

※ 春山 古歌「早春山」花とみし 雪こそ消ゆれ 雪と見む 花の春たつ  
※ 旧大名 一八七一年、麻瀬西園により、これまでにあつた藩(大名)を全て廃し、新たに県を買いた。



宗紀は、大名の中でも、最も長寿を記録

しました。

明治天皇と皇后から、百歳のお祝いの品をいただき、宗紀はそのお札に書を献上しました。

「精神を集中して墨をすり、筆をとつて書をたしなむことは健康長寿によい」と宗紀は語っています。

宗紀の長寿の秘訣は、体力をつけ、健康に気づかう日々の努力にありました。幼い頃から山や川で運動し、弓・馬・槍・剣を一生けんめいに練習し体をきたえました。

隠居後も、とくに生活に気をつけ、早起きをし、規則正しい生活リズムで過ごしました。主治医による検診を定期的に受け、朝夕、天赦園を散歩しました。歩くことは健康によいと、子や孫たちにもお庭を歩くことをすすめました。

また、毎日の食事の分量をきちんと記録し、食べ過ぎないようにしていました。若い頃は、お酒が好きだった宗紀でしたが、隠居後はお酒も控えるようにしていました。

宗紀は、九十歳の頃まで、住まいの一階段を、手放しで自在に昇り降りしていました。この階段はとても急で、手すりの側に頼り縄をつけていました。働き盛りの人でさえ、手放しでは難しい階段を、少しも危なげなく上下していました。



一八八九年の五月一日から、三日にかけて、宗紀の紀寿（百歳）のお祝いの会が盛大に行われました。

宗城・宗徳も、東京から宇和島に帰つてきました。各地から親戚も集まつてきました。住民こそつてちょうどちん行列を行ひ、宗紀の百歳を街じゆうでお祝いしました。書画会、子どもの舞、神楽、花火、闘牛など様々催しものが行われました。

宗紀は、多くの子や孫たちに囲まれ、住民にも祝福されて、とても楽しく幸せでした。

にぎやかな祝賀会で、みんな当時高価だつたビールを飲んで酔つぱらいました。茶席、

宗紀は、その年の十一月二十五日に亡くなりました。

宗紀の名前のように「紀寿」をまつとうしたみごとな人生。宗紀は、一世紀（百年）にわたり長生きしました。

激動の時代に、先見の明で、政治に力を注ぎました。交渉力にもたける一方、人のつながりを大事にしました。

天赦園での散歩や書を楽しみながら、生涯最期まで、世代を超えて多くの人々に尊敬され愛され続けました。

長い人生を通じて、生きる道や徳の大切さを教えてくれる人間的魅力あふれるお殿様でした。

宗紀がつくつた天赦園は、百五十年後の現在も、四季折々の景色で、多くの市民や観光客を魅了しています。



天赦園みどころマツプ



日本一の長寿大名七代藩主伊達宗紀（春山）が隠居後の楽しみにつくつた大・名庭園、国指定名勝。伊達政宗の漢詩の一節、「残照は天の教す所樂しまづして是を如何せん」から「天教園」と名付けられました。



天赦園へ  
ようこそ

◎栗樹碑  
宗紀公の孫で日本のボーイスカウト創設に関わった二荒芳徳伯爵が子供の頃の母の優しさをしのんで建てた碑です。

● 鴨猟場跡  
ここは昔は海につながっており、おとりの鴨を使って野生の鴨を獲ってお殿様が召しあがっていました。

④ 三尊石  
西方から園を守る石。仏様が見守る姿を模しています。

● 白玉上り藤 本日  
白い藤の花の太鼓橋は、極楽  
浄土へと導いてくれる虹の掛橋。

宗紀公が直接筆をふるった字  
が石に刻まれました。



えびす!

鳥帽子形の手水石と文字彫石という不思議なセット。鳥帽子の形は何と自然の造形! 五代村候公はこの石を珍重し、後々も大切にすることいわれをタイムカプセルにして埋めました。明治三十二年にそのカプセルが発見されました!

### ① 八代宗城公の腰掛け石

宗城公がこの石に腰をかけ、幕末の日本  
のゆく末を思案しておられたと伝わってい  
ます。腰をかけると頭がよくなるという説  
も!!!

② 大多行松（多森松）

枝分かれした系図に似ていて  
子孫繁栄を思わせる縁起の良い  
松です。

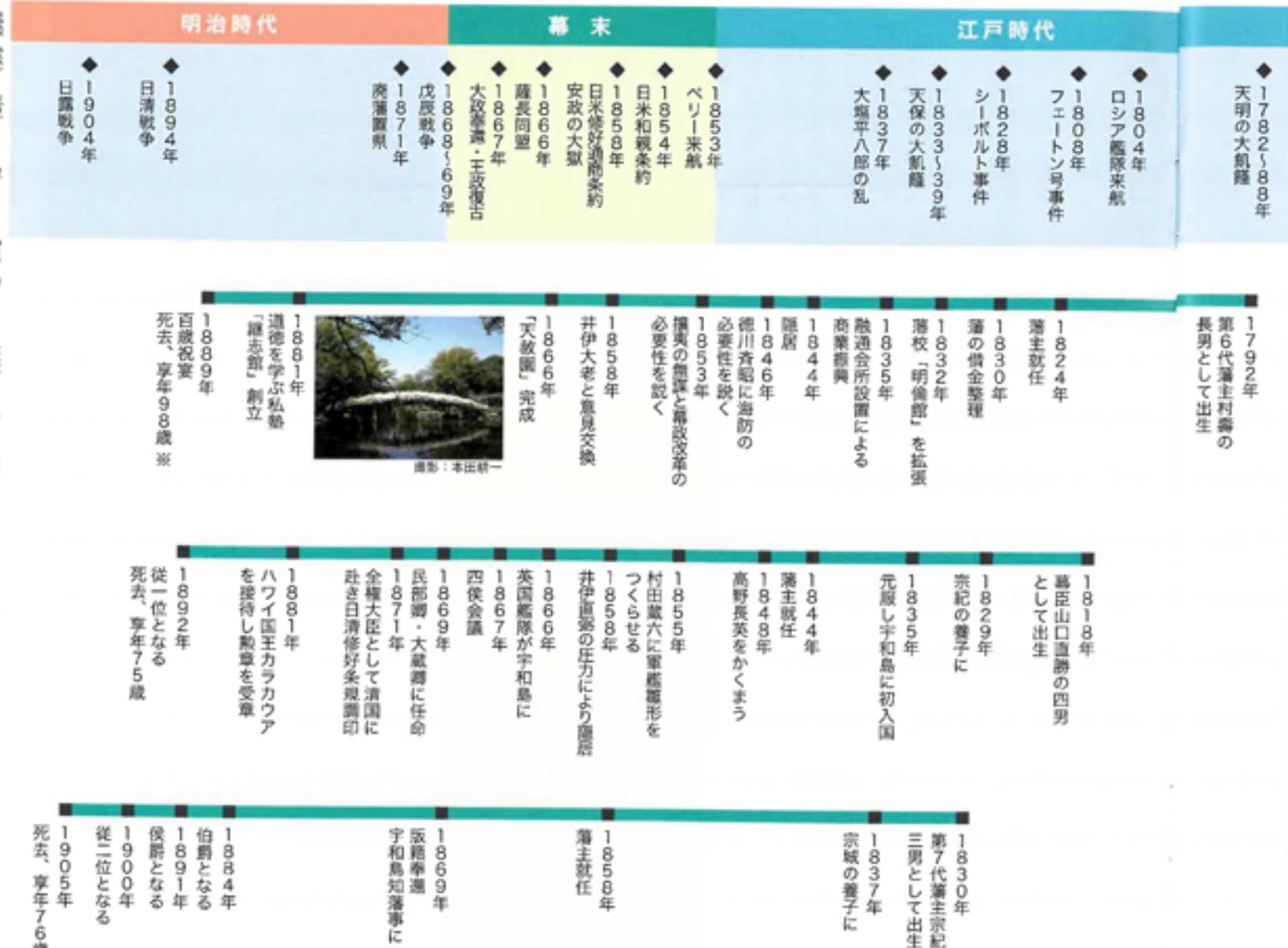
ふうきじゆこう う  
C 実業寿蔵の破

「富貴寿康」とは富があつて貴く  
健康で長生きという意味で、  
宗紀公をあらわす語。太政大臣  
三条実美公の書です。

山の邊を走る桂川

古川源流（上流）は宇和島伊達の発祥の地・仙台東北をあらわします。宇和島藩は伊達政宗公の流れを汲んでいます。

### 【三世代藩主の年表】



左の冊子

七代宗紀

八代宗城

九代宗德



の見事な連携プレーで  
磁い時代を  
の駆け込みにや

(一七九一一一八八九)  
六代藩主・伊達村壽の長男。先見の明  
のある有能な藩主であり、江戸後期か  
ら明治の激動の時代を生き抜き、百歳の  
長寿を全うした。幕末から明治維新  
期の宇和島藩の政治の再建と改革に  
尽力した。厳しい儉約と殖産振興を通  
じて藩財政を好転させた。また、領内の  
医療を改革したり、農業技術を革新  
するなど、領民を大切にした。開国、  
海防などの国事幹せんせんにも活躍。  
なかなか男子に恵まれず、親戚の幕臣  
山口家から龜三郎を養子に迎え、次期  
藩主とした。隠居後は余生を過ごす  
ために天竜園を造る。春山と号し、  
能書家としても有名。

(一八一八一一八九二)  
幕臣山口家に生まれた。(五代藩主  
村候の曾孫) 宇和島藩の軍事近代化を  
進めた。町人の嘉成(前原方山)に蒸気船  
建造を命じたり、シーポルトの娘柳本  
イチに医者として奨励金を与えて、宗徳夫人  
キヅの出産に立ちあわせるなど、身分や  
経験にこだわらない大胆な人材登用を行つた。幕府に協力する一方、天皇の  
命令で何度も上京し、国事斡旋に活躍。  
慶応二年、英國艦隊の宇和島訪問を受け  
入れ、英國大使バークス一行を大歓待した。  
バークスの部下アーネスト・サットは、「四  
国の小領地にはもつたいないほど有能な  
大名の中でも一番の知恵者」と讚えた。  
明治新政府では外交に手腕を發揮した。  
灯台、造船、電信、鉄道など、近代化

(一八〇〇—一九〇五)  
七代藩主・伊達宗紀の三男。宗城が次期  
藩主に決まってから生まれた男子。夫人  
は秋田佐竹家出身の性姫。  
幕末、宇和島藩は宗紀・宗城・宗徳の  
三世代体制であり、宗徳は宗城を補佐  
し、幕府との関係調整や諸大名家と  
の交際などにあつた。

百歳長寿の名君  
字和島七代藩主  
伊達宗紀



ばくまうりけんとう  
幕末四賀侯の一人  
だいはんしゆ  
宇和島八代藩主  
じとくわぬなり  
伊達 宗城



ほんとうの ほんとうの  
宇和島藩最後の藩主  
だいほんしゆ  
宇和島九代藩主  
だて かねと  
伊達 宗徳



**激動の時代** 日本をリードした宇和島

## 物語にまつわる資料

二世代藩主が生きた時代から今に残された貴重な宇和島の財産です。

### 伊達宗城所用の鎧 金小札卯花威具足



一八五四年水戸九代藩主徳川齊昭から伊達宗城に贈られたもの。

胴と草摺は卯の花色で、いかにも優美である。糸に野蚕のやのを使用している」とから、別名「金小札野蚕威具足」ともいう。野蚕の糸は伸縮性に富み、光沢がある。容易には染色できるという特性がある。

春日大社に奉納されている御神事とされる鎧(鎌倉時代作「赤糸威鎧」、国宝)を模本として、一八三九年徳川将軍家お抱え甲冑師の手によってつくられたものである。このため、別名を春日野鎧と称されている。

前立には、大歎方を使用し、その中央の腋立に鷹軍を一つかせている。鷹は豊田秀吉の馬印とされている千成が去った後の慶永三年(一六五〇)初夏、外國使節の上陸接待となりよいに宇和島藩領の南の要として築いたが、現在は廃城の名残りといふ。

鷹崎砲台は、安政二年(一八五五)宇和島藩の守りとして、山を切り海を埋めて築造され、五門の大砲が備えられた。当時宇和島に来ていた村田藤六の著述とされる。なお、恵美須山にも砲台が築かれたが、当時の面影はない。

建立には「春日」の文字が見える。



### 宗紀百歳の書 龍出洞門常心雨 鶴巢松樹不羣年

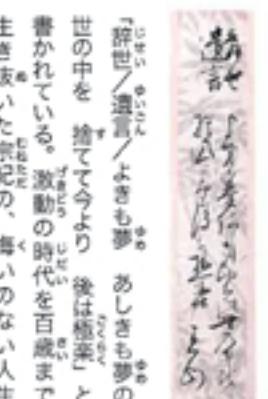
晩年は書家春山として活躍



「龍出洞門常作雨 鶴巢松樹不知年」明治二十二年(一八八九)、宗紀百歳の書。勢いに満ち溢れる書入れである。宗紀は天教園で鶴の飼育をしていたとされ、また土佐藩山内家から贈られた贈呈されるなど、鶴を愛していた様子が伺われる。

宗紀遺言の和歌

辞世短冊



### ハワイ国王勲章 ハワイ国王勲章

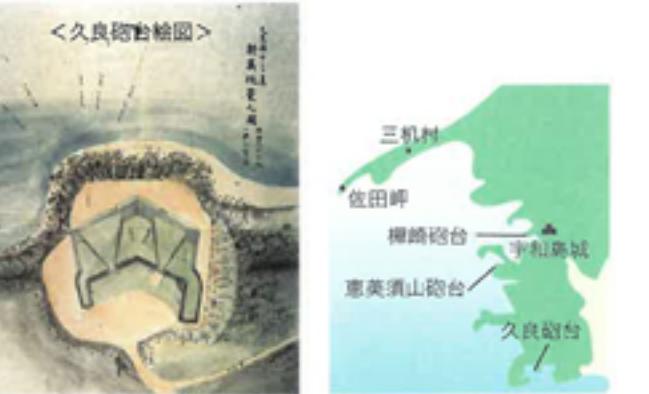
明治十四年(一八八一)、ハワイ国王カラカウア王が来日した際、王の接待をつとめた伊達宗城に贈られた第一等勲章。

外国の君主が日本を訪れたのはこれが初めてであったことから、明治政府は王を丁寧にもてなし、大変喜ばれた。そのお礼としてハワイ国王から、日本の關係者に勲章が贈られた。

宗城に贈られた勲章と勅記(勅章受章の証明書)は、その後も宇和島伊達家に大切に伝わり、この時の両国の方好のあかしなっている。



### 宇和島を守るために築かれた砲台 天教園(南御殿)古写真



### 宇和島を守るために築かれた砲台 久良砲台跡・桟崎砲台跡

久良砲台は、伊達宗城が招いた幕府のお尋ね者酒井長英が、調査説明に従事した。二門の大砲が備えられた。完成は、長英が去った後の慶永三年(一六五〇)初夏。竹に雀の装飾金物を打つている。鷹崎砲台跡は、大歎方を使用し、その中央の腋立に鷹軍を一つかせている。鷹は豊田秀吉の馬印とされている千成の一つを入手したものと記録されている。

建立には「春日」の文字が見える。

宗紀の隠居生活がうかがえる

現在天教園の広い敷地にはててあるあたりに、かつて宗紀が田舎生活を送っていた隠居の大きな庭園があった。隠居はこの隠居を源氏庭園と名づけ、源氏や春雨亭などを建てて、源氏の移り変わりを楽しみながら、余生を送った。写真の建物には「源心館」という額がかかっていながら、JJPは源氏庭園に宿泊してしまったところから、源心館は「西御殿」と呼ばれています。天教園は「南御殿」と呼ばれ、当時は「西御殿」と呼ばれていた天教園を訪れ、大歎方を受けた。

明治時代にも  
宇和島はハワイと  
交流があったのじゃ!

# 宇和島藩ゆかりの偉人たち

身分・性差・常識にとらわれない自由な考え方の宇和島藩は、多くの人材を発掘、活躍させました。

悲運の蘭学者  
高野長英



奥州市立高野長英記念館 所蔵

伊達の黒船をつくりた男  
前原巧山



宇和島市教育委員会 所蔵

(一八〇四～一八五〇)  
陸奥国水沢生まれ。長崎でシーポルトに学び、江戸で医院・蘭学を開く。天保十年（一八三九）、著書「藝物圖」が幕政批判の書であるとして入年（藩社の賜）するが、脱獄し、各地を巡回。伊達宗城がひそかに宇和島に呼び寄せ、家老板田氏の別邸で蘭学教授にあたるほか、蘭書翻訳、久良疏台の調査設計をした。宇和島藩代が幕府に謁見したとの情報により、再び逃亡。嘉永二年、江戸で幕兵に捕縛され、抵拒して自殺。

維新十傑の一人  
大村益次郎



国立国会図書館 所蔵

(一八一四～一八六九)  
長崎生まれ。総方洪庵の適塾で塾頭を勤めたのち、長州生還。総方洪庵の適塾で塾頭を勤めたのち、長崎で村医となるが、一八五三年、宇和島を訪れる。伊達宗城に認められ、兵学書翻訳、軍艦・蒸気船の建造にあたりほか、神田川原に村田塾を開く。宗城によって村医重用され、娘高子は宗城夫人鶴姫の小姓女中になる。長崎と宇和島で医院（外科・産科・眼科）を開業。忙しく往来し、情報収集にも携わる。明治二年（一八七〇）、東京築地に産科医院を開業。明治二年（一八六九）、宇和島市で銅像の建立の話が出たが、「銅像にて仰がるより万人の渡らるる橋となりたし」との生前の趣向が「總積橋」と名づけられた。代わりに改築中の橋が「總積橋」と命名された。

日本初の女性産科医  
楠本イネ



大洲市立博物館 所蔵

(一八一七～一九〇〇)  
長崎でシーポルトと遊文たきとの間に生まれる。石井宗謙

二宮敬作などシーポルト門下生がの医学を学んだ。元治九年（一八六四）、宇和島で伊達宗城・宗徳と面会。以後、伊達家に重用され、娘高子は宗城夫人鶴姫の小姓女中になる。長崎と宇和島で医院（外科・産科・眼科）を開業。忙しく往来し、情報を収集にも携わる。明治二年（一八七〇）、東京築地に産科医院を開業。明治二年（一八六九）、宇和島市で銅像の建立の話が出たが、「銅像にて仰がるより万人の渡らるる橋となりたし」との生前の趣向が「總積橋」と名づけられた。代わりに改築中の橋が「總積橋」と命名された。

民法の生みの親  
穂積陳重



宇和島市教育委員会 所蔵

(一八五五～一九一六)

宇和島藩の上級武士の家に生まれ、幼い時から学才にすぐれた。英・独留学で法医学を研究帰國後、明治十五年（一八八二）東京大学教授兼法医学部長に就任。伊達宗城の勧めで浜沢栄一の長女歐子と結婚。民法のみならず法律学の幅広い分野で先駆者として活躍。宇和島市で銅像の建立の話が出たが、「銅像にて仰がるより万人の渡らるる橋となりたし」との生前の趣向が「總積橋」と命名された。代わりに改築中の橋が「總積橋」と命名された。

関西財界の雄  
土居通夫



宇和島市教育委員会 所蔵

(一八三七～一九〇八)

宇和島藩の下級武士の家に生まれ、児島惟謙は竹馬の友。宇和島に来た坂本龍馬と剣術の試合をし、龍馬の義理思想に感化され、出鄉して尊皇攘夷の志士と交流したと伝えられる。明治二年大阪府に勤務。司法官を経て、明治二十年、大阪電燈株式会社を設立。同二十八年、大阪商業会議所会頭に就任。同二十九年、盟友五代友厚の三女万子を養女にし、伊達宗徳第五子剛吉郎を婿婿にした。関西財界に重きをなし、大阪の世界ルナパークの開発にも尽力。通天閣は土居通夫の一字を取ったといふ。

竹馬の友

児島惟謙 土居通夫



(明治3年12月撮影)  
宇和島市教育委員会 所蔵

(一八一一～一八九二)  
宇和島藩領八幡浜に生まれ、名を嘉蔵といい、四十歳の頃、城下本町の長屋に移住。提灯の張替え、仏具の製作と修理、武具の修理など、注文があればなんでもなした。器用だと評判の「おようらん屋嘉蔵」は、嘉永七年正月、村田義六（後の大村益次郎）が主導する軍艦及び蒸気船建造のプロジェクトチームに雇われた。

軍艦は模型（二人乗り・〇・六トン）を完成したところで事業を中止したが、宗城は蒸気船をあきらめず、嘉蔵は長崎・鹿児島で苦心惨憺して先進技術を学んだ。安政四年の初め、伊達宗城に認められ、兵学書翻訳、軍艦・蒸気船の建造にあたりほか、神田川原に村田塾を開く。宗城によって村医重用され、娘高子は宗城夫人鶴姫の小姓女中になる。長崎と宇和島で医院（外科・産科・眼科）を開業。忙しく往来し、情報を収集にも携わる。明治二年（一八七〇）、東京築地に産科医院を開業。明治二年（一八六九）、宇和島市で銅像の建立の話が出たが、「銅像にて仰がるより万人の渡らるる橋となりたし」との生前の趣向が「總積橋」と名づけられた。代わりに改築中の橋が「總積橋」と命名された。

司法権独立の父  
児島惟謙



国立国会図書館 所蔵

司法権独立の父  
児島惟謙

児島惟謙は竹馬の友。

イギリス艦隊宇和島へ

全国二六〇あまりの藩の中で、バーケスの英  
二〇一六年はバーケス來訪（ひき）百五十周年です。



ぐんかんき  
サラミス号の軍艦旗

通訳官アレクサンダー・シーボルトは「英國東洋艦隊が子和島を訪問したいと願っています。世界最大の艦隊が子和島を訪問するのです」と告げた。キング提督率いる英國東洋艦隊が長崎に寄港中で、英國

公使ハリー・バークス大使と今庭エレン・メアリーを東せていた。薩摩(鹿児島)は艦隊を受け入れます。宇和島もそつなさうでは、薩摩藩十五万石厚もすすめる。おりしも、幕末戦争、「長州再征」が始まっていたが、薩摩と長州はひそかに同盟していたので、「五代友厚」は、英國艦隊の訪問によつて宇和島軍を長州攻撃に参戦させない意図があつた。

バクス來訪



国際日本文化研究センター 所蔵

長崎原在中の元和風洋室モダン居間を  
楠本イネが訪ね、「弟のアレクサンダーが  
面会を望んでる」と。会へる。英國

れるくらいなら死んだほうがまし」という  
御馳走の島津久光とは正反対である。特に  
異常はないが、もし調子が悪いのであれば、  
それは七十五歳という年齢によるものであ  
る、という診察であった。要介は暗くなる  
まで起き、若い女性たちによる歌舞音楽も  
あった。一行は華やかな提灯行列で船形の  
船着場まで曳きられた。

アーネスト・サトウ來訪  
—ダンスを踊る伊達宗城



港區立港鄉土資料館 所藏

慶應二年（一八六六年）十一月一日—一  
英國書記官アーネスト・サトウの乗る客船  
アーガス号が、新嘉坡領のために來港した。

さができるサトウは英國公使バークスから  
情報探索の任務を与えられていた。  
サトウは横浜から長崎に向かい、横本  
医院のイネを訪ねた。若い宇和島藩士の  
先客がいた。横本医院は藩士の情報交換の  
場でもあった。サトウは鹿児島を訪問した  
後、宇和島に向かった。

摩藩と宇和島藩だけでした。

れた。  
西田の回遊遷徙を経て西田河源山地に定着する。

英吉は、猛暑の中、本町や裡町界隈を散策した。町人はひれりて歎息し、果物を差し出す者もあつた。アーヴィング・ロイヤル君は一般公開され、老若男女が顔面をなして乗り込んだ。鹿児島では「のよひな」とは

なかつた。  
二十七日午前十時、サニックスが和島  
に入港した。三十人はどの伊達家の女性  
たちが軍艦見物を楽しんだ。両殿様は家族  
をパークスに紹介した。鹿児島ではみら  
れなかつたこの西洋風の歓迎はパークス  
を非常に驚かせた。午後四時十五分、

英成、二百名と宇和島藩兵の合同軍事訓練を三之丸練兵場で実施した。

二十八日、西殿様は家臣百人を連れてフリンセス・ロイヤル号に上陸。國際樂隊、砲擊訓練を見学した。船上での晩飯のあと、バークス一家、キング提督以下士官らは小船で海面巡査し、船頭をバーネットと南殿様へ向かうとした。料理はすべて日本食。英国人は湯呑を好むというので、酒々から車海老を調達し、新鮮な鰐も準備した。この晩飯でも西殿様は西洋風に家族を紹介し、バークスを驚かせた。

太刀を持った小姓女中を従えた春山(春紀)が登場した。春山は公使館駐留ワリストの建築監修を担当し、個人としての

には大きな伊勢海老いせえび、大きな鰯いわしうなぎ、大盛で

「Jはれど、宗城は兵庫開港問題を問題とした。貿易で利益を得たいと考えていた。宗城は問題には理解がある。」宗城は、「ハンブルは嫌い、イギリスが好き」と語り、英國の内政干涉を望んだが、サトウは英國が日本の内政に干渉するとは危険だと明言した。サトウが横浜の英字新聞に発表した論説「英國と米國」について語ると、「ああ、それなら翻訳させて読んだことがある」と宗城はこともなげに答へ、サトウを驚かせた。宗城

は、先に、女たちも何んで何か音楽をやらせ  
まつり」と改題に関する説明を口に切った。  
ハレムの美女たち一側室や奥女中がなだれ  
「ひんできた」子供たわむらぶ。  
音楽が運ばれ腰やかな歌と踊りが始まった。  
サトウは十五歳に耳打ちしてホーン・パイプ  
(水兵の甲板での踊り) を譲らせた。両腕を  
胸で組み、足を蹴つ上ける奇妙なダンスに  
人々は見入った。驚くべきことに、宗城が  
ふるふると立ち上がり、英兵と腕を組んで  
踊る。一人の家老も加わり、ダンスに興じた。  
「」のあとサトウは松風図書の屋敷に連れ

英國水兵が平板から海上に投げ捨てたビールの空き瓶を、先を争って拾い、稍箱に入れ、ギヤマン徳利として家宝にした人も多かったという。

9代藩主夫人佳子の  
華やかな婚礼調度

家族や親族に囲まれる宗紀公  
明治22年(1889年)5月



納子（宗徳夫人）

宗徳（宗城二男）

保科節子（宗城七女）

八代宗城（七十歳）

栗原初子（宗城一女）

七代宗紀（百歳）

陸子（康虎夫人）

九代宗徳（六十歳）

真田幸民（宗城長男）

栗虎（宗徳三男）

高橋正昭（節子の三男）



花菱月丸扇紋散脚絵三棚  
(書棚・扇子棚・黒棚)

婚礼調度の中心の3つの棚。  
今日でいえば、家具に類する大型の調度である。



花菱月丸扇紋散脚絵女乗物

久保田藩邸（現・御徒町あたり）から  
宇和島藩邸（現・六本木あたり）への  
奥入れに使用された。



9代藩主夫人  
佳子

宗徳は長州藩毛利家から嫁子を迎えたが、まもなく亡くなつたので、秋田久保田藩佐竹家の住子を繼室に迎えた。佳子を三弦を弾いて、自筆の和歌も残っている。

●文久2年の幕府の制度改革により、大名家の夫人たちは実の領地に住むことが許され、宗紀夫人嫁姫、宗城夫人嫁姫、宗徳夫人嫁姫は相次いで宇和島入りした。佳姫は宇和島で月見、花見、祭り見物、舟遊びなどを楽しむが、32歳で没した。

大家の女性たちの一生の中で、最も重要な儀式が婚礼である。大名家の婚礼は幕府によって厳しく統制され、許可が必要とした。婚礼は結ばれる両家を超えて家と家の大切な行事であった。娘の婚礼に際し、大名は两家の家格を誇示し、前もって「御道具」を準備させ、豪華な嫁入り道具を最高の品質で大量に製作し、両家の間で取り決められた日に盛大に「御道具送り」を行つた。婚礼調度は、女性の生活用具が主体で、化粧道具・遊戯具・楽器・屏風・衣装など多岐にわたつてゐる。

# 宇和島信用金庫 IDEA



宇和島信用金庫 IDEA は、私たちの目指すべき方向やあるべき姿を定めた、企業理念体系です。

企業理念は創業の精神を尊重した「愛郷心と人生美の創生」とし、目標とすべき5つの方向軸を明確にしています。IDEA の五角形の形は、宇和島城を中心に五角形に形成され繁栄した宇和島の街と重ね合わせ、地域に密着した金融機関として、末永く、地域から愛され必要とされる信用金庫で在り続けられるよう願いを込めています。

絵本「伊達宗紀公物語～天が教した長寿大名」は、宇和島信用金庫 IDEA のもと、天教園完成とバースト来宇の150周年を記念して制作されました。

未来を担う子どもたちに、宇和島のすばらしい歴史・文化を知って欲しい、そして長く継がれていくものを残していくといった想いです。

子どもも大人も一緒にお楽しみいただけだと幸甚です。

うわしん NEXT100 絵本制作プロジェクト実行委員会

2016年3月吉日

企画編集 伊達実紀	構成執筆 宇神幸男	絵本制作 荒木敦子
監修協力 平井倫子（宇和島市立明倫小学校校長）	特別協力 公益財団法人宇和島伊達文化保存会	参考文献 兵頭賢一「伊達宗紀公伝」、「幕末維新の宇和島」（愛媛県文化振興財团）、 神川武利「伊達宗城」、谷有二「うわじま物語」、 宇神幸男「シリーズ著物語宇和島篇」
宇和島市立伊達博物館	企画制作 うわしんNEXT100 絵本制作プロジェクト実行委員会	後援 宇和島市 宇和島市教育委員会 株式会社コトガイア 荻原実紀、田中裕子、リチャード・智恵子、荒木敦子